

---

# 僕の彼女は

三条司

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

僕の彼女は

### 【Nコード】

N2303E

### 【作者名】

三条司

### 【あらすじ】

まだ書いていない本編の番外編のような位置づけ。ツンデレの女の子と、朴念仁の男の子の、何てことないラブストーリー。猫も出てきます。

Please don't be angry, sweety

「塙太のばか！ばかばかばか！」

乾いた音をたてて、皋月さつきが塙太をひっぱたく。その反動で少しばかりよろめいた塙太は左右にたたらを踏んだ。それでも、涙を浮かべてきつとこちらを睨んだままの皋月に何かを言おうとしてドアに向かい、眼前で思い切りよく閉められたそれに鼻っ面をこれまた思い切りよくぶつける。いててと呻いて数歩下がると、そこには先程皋月が投げつけてきた毛抜きがあつて、そうとは知らずにその上に全体重をかけた塙太は悲鳴を上げる羽目になった。その拍子に体のバランスを今度こそ崩して壁に肩から斜めにぶつかり、その勢いで外れた額縁の角が脳天を直撃した。

「何やってるの、塙太」

声も出せないほどの痛みの中で、視界がゆらゆらとゆれる。背後からかけられた声の方へやと振り向くと、声の主はきらきらと艶めく黒い毛並みをこれ見よがしに輝かせて、じつと塙太が回復するのを待っていた。

「瑛里……」

どこからどう見ても黒猫以外の何者でもないその生き物は、しかして流暢な日本語で塙太に話しかける。

「おれ、皋月怒らせちゃったみたい」

「いつものことでしょう、それは」

「いや、今日のはまじで酷かった。ほら見て、これ。ひっぱたく

のはもう慣れてきたにしてもさ、首筋噛んだんだったら、超痛かったよ、もう……」

「首筋噛まれるほど怒らせる塙太の気がしれないけどね、ボクは」

つんとすました顔で、冷たくそう言い放たれると、塙太は途端に大人しくなった。

「何でこうなっちゃうのかなあ」

そう呟いて、ずるずると衣擦れの音をたてながら壁にもたれるようにへたりこんでしまうと、塙太はフローリングの床の木目をじっと見つめたまま黙りこくってしまう。その顔は十九歳とは思えないほどの哀愁をたたえていて、瑛里は聞こえない程度に一人ごちた。

「どっちもどっちだと思うけれど」

皐月が塙太の家に居候し始めてからかれこれ四年の歳月が経つ。皐月の母親が塙太の亡くなった母親の親戚だとか何だとかの縁で、塙太の家を頼ってきたらしい。

お世辞でも何でもなく事実として、皐月は天下無敵の美少女だ。それは生涯初の一目惚れを経験した塙太が保証する。ただ、彼女はただの美少女ではなかった。

魔女だった。

好きかと思ったときには、彼女はもう魔女だったのだ。受け止めるしか仕方あるまい。そもそも、皐月は皐月で魔女だとかはあんまり関係ない。と、塙太は思っていた。そんなわけで始まった魔女

つことの『お付き合い』が平々凡々としているわけもなく、塙太の生活はそれから一変した。感情の起伏の激しい臯月による生傷の絶えない日々。マジシャンが使うマジックの如く使われる魔法によって驚かされ続け、胃がきりきりとストレスで痛むことなどは日常茶飯事。何よりも、諾々と過ごしていた時間は臯月によって色鮮やかなそれにとって代わられた。

些細なことで臯月は怒る。それはもう、怒り狂う。そしてそれをとて正直に塙太にぶつけてくる。それはもう、一直線にぶつけてくる。

それでも、塙太は臯月が好きだ。それは容姿うんぬんの話ではもはやなくて、ただただ好きだ。でなければ、毛抜きを魔力で飛ばしてきて自分の眼球を狙うような女の子と誰が一緒に暮らすものか。

好きだ。その気持ちに嘘偽りなどない。なのに、臯月はたまにそれを信じない。今日みたいに。

塙太はそれが何故なのか、四年経った今でもわからない。

「臯月？聞こえてる？」

何度目かに塙太が臯月の部屋をおそるおそるノックする。もちろん、今回も返事はなしだ。小さくため息をついて、そっとドアの前から離れる。未練がましく振り返りながら廊下を渡って階下へと向かった。

リビングルームでは無害なテレビががやがやと音を立てている。特別見たいわけでもなくて、ただつけてみただけのテレビ。

「埴太！」

その無害で大人しいテレビ画面いっぱいには皐月の顔が写る。皐月は魔法を荒使いするところがある。そこも可愛いのだが。

ソファに座ってて良かった。

声に出さずに埴太は思う。危うく腰を抜かしそうになったから。

「皐月」

「あのね。あたし、すっっごい怒ってるの。わかる？」

気付かないひとがいたら異常だと思う。

「う、うん。わかるよ」

「じゃあ何であたしが怒ってるか言ってみなさいよ」

「え、ええと、あれかな。おれが今朝牛乳をコップに入れないで直にボトルから飲んだから、かな……」

「違う！っていうか、あんた、あたしがそんなみみっちいことで怒り狂うような女だと思ってるの？違うわよ。全然、違う！もっと重要なことなの！」

そんなみみっちいことで怒ったことがあるのは皐月なのに。

「じゃあ…何だろう…」

「もういい！埴太にひとの気持ちを慮るような繊細さを要求したあたしが馬鹿だったのよ！もういい！！」

一方的に怒り、一方的に会話を中断、再開し、一方的に捨て台詞

を残す。実に皐月らしい。哲学者の目線で塙太は、もとの控えめな箱に戻ったテレビを見つめる。

「今回は何だか長引きそうだね」

「うわぁ！」

耳元で囁かれて、塙太は今度こそソファの上で軽くジャンプをする羽目になった。

「瑛里かあ。驚かさないでよ。足音くらい立ててくれればいいのに」

「それって、猫としての常識に反するんだけど」

しれつと返してくる黒猫に苦笑で応ずる。それから、深い深いため息をついた。

「お手上げだよ、瑛里。なんなの？何がそんなに気に入らないの？もうね、全然わかんない。色々、手は尽くしたんだけどさ……」

「色々って？」

「苺をね。皐月のお気に入りのハート型の皿に盛って部屋の外においたんだ。ホイップクリームも忘れないでつけておいた。ほら、前にバタークリームでやつちゃったときは、カロリーと健康にも気が付かない男って最低って、怒鳴られたからさ。それから、イチゴミルクのシェークを急いで作って部屋の外においた。ちゃんと、氷も入れてだよ？ぬるいシェークなんて、感じが悪すぎるって皐月が言うからさ。それから、ええと、ブーツは全部磨いたでしょ、リネン類もアイロンをあてておいた。あ、もちろん、皐月の好きなリネンウオーターを使っただよ。あとは、あ、香水入りのキャンドルも部屋の外に……」

「塙太」

器用に前足の二本の爪だけをにきりと出してみせて、瑛里はその漆黒の瞳に呆れの色を如実に表すと、

「ひとつ。皐月は何、キミの彼女なの？それともペットなの？ふたつ。塙太は何、皐月の彼氏なの？それとも執事なの？」

「彼氏彼女だと思うんだけど…」

戸惑いつつも即答する塙太を見て、瑛里は塙太にも聞こえる声で一人ごちた。

「勘弁してよね」



## Please guide me, sweetly

塙太の母親は塙太がまだ小学生になるかならないかの頃に亡くなった。だから、鮮明な記憶というのはあんまりない。だけどひとつだけはつきりと覚えていることがある。

『女の子には優しくしないとだめよ』

耳にたこが出来るくらいに、その言葉を聞いた覚えがある。それは、甘い呪いとなって塙太を包み込んだ。時として度を越したレディファーストは誤解を産む。何気なく接したつもり相手に、塙太が彼女を好きなのだと誤解される。それはいつしか噂という形になって臯月の耳に届く。いつも、そういった噂は塙太のまったく計り知れないところで、臯月の方へと先に届くのだ。そして、臯月が泣く。しかも、怒る。塙太はその都度反省する。臯月の泣く顔なんて、本当は見えていたくないのだ。反省する。だけれど、どうやってそういった誤解を減らせればいいかが、いまいちわからない。

「最低だよ。もうね、最悪。塙太は元々頭の出来は良くないけど、そこまでだとは思わなかった。ある意味、完璧だよ」

夜のリビングルーム。灯りに照らされて瞳孔が狭まった猫科の瞳で睨みつけながら、苦々しい口調で瑛里が言う。さらさらりと酷いことを平気で口にする猫に、塙太は曖昧な笑顔で、

「え、そんなにだめ？」

どうやら臯月は何かに対して相当鬱憤が溜まっているらしい。そしてそれは塙太が気付いていないことらしい。それは何か。

ことなかれ主義の瑛里とて、主人があのようにへそを曲げていては寢床に戻りにくい。相談にのってあげても良い、と居丈高に言った猫相手に、塙太は懸命に今までの経緯を話し始めた。

いつ皐月が怒ったのか。どうやって怒ったのか。どうやって機嫌を直したのか。

エピソードは尽きることもなく、小一時間も塙太は延々と皐月が怒った話をし続けていた。未だ終わりの見えない塙太の語りにしびれを切らした瑛里がストップをかけたところ。

「そんなに、だめ？」

確認するように、聞く。その語尾はごにごによと口の中だけで呟かれるばかり。

「だめだね。そりや皐月も怒るよ。むしろボクには、何で塙太が今までのその数々の経験の中で学んでこなかったのかが理解不能」

「えええー……」

がつくりと頭を垂れてうなだれる哀れな塙太をすまし顔で見やると、瑛里は、

「ねえ。本当にわからないの？」

「何が？」

「皐月が怒るのはまあしょっちゅうだし、あんな直情的な性格してるからすぐにかつかするけれど。でも、わからないかなあ？いつも皐月が塙太にああやって怒りをぶつける時は決まった理由があると思うんだけど」

「本当に？」

「いや、だから。それを塙太が気付かないと、いつまでたっても同じだよ」

「そっか」

気付かないとだめか。そういえば臯月もよくそのようなことを言う。鈍いとか気が利かないとか朴念仁とか。

このままでは同じことの繰り返し。瑛里の言うことももっともだ。おれが変わらなくては！

決意に燃えた瞳をきつとあげて、塙太が瑛里を見つめる。お、と瑛里は片方のひげをぴくりとさせた。これはもしかするともしかして問題解決か、と。

「瑛里。おれ、変わるよ。もう同じことで臯月を怒らせたらしい」

「うん。そうだね」

瑛里が満足そうに尻尾をくゆらせる。やれやれ。これで今日は安眠出来そうだ。

「何に気付けばいいのか、教えてくれないかな」

真面目にそうほざく塙太を、瑛里はしばし見つめ返して、ややあつてからゆるりと首を振る。

「もうね。全然駄目」

皐月の好きな食べ物ならいくらでも挙げられる。皐月の好きな色、好きな匂い、好きな作家にテレビに漫画に音楽、何だって挙げられる。

何でもわかってるさ。と傲慢になるつもりは塙太にはまったくない。と、いうのもひとつわからないことがあるからだ。

皐月は好き嫌いが非常にはつきりしている。感情表現も非常にわかりやすいものを好む。二人の間の距離をぐんと縮めたのも、最初に手をつないできたのも、皐月だ。キスを最初にしたのだって皐月からだった。大好き！とは皐月の口癖だが、塙太にはそれがどうにもよくわからない。

「なんで、皐月はおれのことを好きなんだろう？ って。思うときがあるんだよね。別に自分を卑下するつもりなんてないんだけど、何でおれなんだろうーって。たまにね」

ため息をつくのすらも無駄に思えてきて、瑛里はふんと鼻息をもらした。ついでに口を開く。

「まあ、今みたいなことを不思議に思ってる時点で、塙太はだめだめ人間確定だよな」

「ええー、厳しいなあ瑛里は」

苦笑して後ろ頭を掻く塙太に、

「いや、真剣にそう思うよ、ボクは」

とどめをくわえてやる。

その声音があまりにも淡々としていたので、塙太は上目遣いをするようにテーブルの上にきちんと座ってこちらを見つめ返している黒猫を見やった。丸い大きな瞳に、不安そうな自分が映っている。

「おれって……」

「またそれ？おれは、おれって、おれも、おれが、おれおれおれ。塙太は何だかんだ言って、自分のことしか考えてない。見えてない。皐月はどうしたの？どこに行っちゃったの？」

瑛里にしては珍しく苛立った声でそう問い詰められて、塙太はしどろもどろに、

「皐月は…皐月は…」

言いかけて、やめる。なに、と小さく瑛里が続きを促した。一度目を瞑ってから、息を大きく吸う。そして、

「皐月は、いつでも中心にいるよ。何してたって、どこにいたって、おれの軸は皐月だから。皐月と出逢ったときから」

思いがけず熱い塙太の心の内を目の当たりにして、今度は瑛里が黙る番だ。しかし一瞬のあとに、いつものペースを取り戻すと、にやりと笑った。

「それ、皐月が聞いたら、どうするかな」

「ええ！」

顔を真っ赤にする。皐月が今のを聞いたら。それはありえない。というか、ありえないで欲しい。だって恥ずかしいではないか。愛の告白なんて。そんな。皐月じゃないんだから。みんながみんな、皐月のように素直に表現出来るわけではないのだ。少なくとも、塙太には難しい質問だ。

「ただ、だめだよ！こんなの聞かせられないでしょ。絶対、だめ」  
「塙太さあ」

言いながら、そろりと前足を出して歩き出す。長い尻尾は催眠術師のコインのようにくにくにやりと塙太の眼前を揺れる。

「臯月に、一度でも好きって言った？」

「……………」

答えようとして踏みとどまる。言った。と思う。でも、本当に？四年間分の思い出をダイジェストで頭の中で再生する。高速再生。見当たらなかった。妙だけど、見当たらなかった。その事実には愕然とする。心の中では何万回と唱えているっていうのに。

言っていないのか。おれは。それって、最悪じゃないか？失礼っていうか、わかりにくいっていうか…。不安になるのは臯月の方かもなあ…。臯月じゃなくても怒るかも！

「言っ、ないかも…」

「言っ、てあげないの？」

言葉と共に、瑛里がもう一度、尻尾を揺らす。それを合図にして、塙太がソファから立ち上がった。ばたばたと慌ただしい足音をたてて、二階へと急いで行く。

「手間がかかるったら」

Please show me a smile, sweet y

「皐月！」

ノックも忘れて皐月の部屋に入ってしまったことに気付いて、ごめん！とまた小さく叫んで、一旦部屋の外に出る。いつもならここで殴り倒されてもおかしくないのだ。皐月は自分の部屋に無断に入られるのを嫌う。コンコン、と素早く二回ノックをしてから、もう一度部屋のドアを押し開けた。

「あれ？」

さつきは急いでいたので見えなかったらしい。皐月の部屋はその主を欠いていた。あちらこちらに散乱するぬいぐるみや筆記用具やら服やら本やらその他の小物やらが、皐月の苛立ちを如実に語っていて、一瞬埒太は絶句する。が、すぐに気を取り直して階下へと急ぐ。

とぐろを巻くような格好でソファの上でうつらうつらとしている瑛里に、

「皐月、いなかった！」

必要以上の大声で報告する。

「じゃあ探しなよ」

眠りの邪魔をされて、不快感を露わに返ってきた瑛里の言葉に、  
「言われなくても探しに行くよ」

答えた。

好きなもの。嫌いなもの。怖いもの。嬉しくなるもの。たまに好きでたまに大嫌いなもの。興味はあるけどそこまでは好きじゃない

もの。バラエティに富んだ好き嫌いを皐月は持っている。嫌いになることなんて殆どない塙太にとっては、それすらも新鮮だ。

イライラして、とりあえず部屋のものに当たり散らしてみただけ、まだ気分が収まらないから外に出た。そんなところだろうか。

庭用のサンダルをつっかけただけで外に飛び出した。走りにくいことに気付く。空気が肌寒い。もうそろそろ秋なのか。そんなことにもようやく気付く。

まずはコンビニ。家からたったの五分で着けるここに、皐月は来るはず。それとももう来たあとか。

いない。

いまだに両目とも一・五の自慢の視力で皐月が店内にいないことを確かめると、迷わずに引き返す。そして、ひとつめのコーナーを右に曲がる。あとはまっすぐ。

カンカンと木製のサンダルが音を立てる。何かに似てる。ああ、あれか。踏切だ。カンカンカンカン。踏切が閉まってしまえば、もう渡れない。遅れてしまえば、もうそれっきり。それっきり。悲愴感漂うような自分の思考に、塙太はふ、と笑みをもらした。

まったくもつ。

出逢ったときからそうだったのだ。皐月だけが、塙太を焦らせ、追い詰め、焦らして急がせる。マイペースだと自覚している自分の性格では考えられないことだ。本当に。そこに疑問なんて挟むべきじゃなかった。何で好きなんだろうとか。いつまで好きなんだろうとか。そんなことをしている暇があるなら、もっと皐月に答えれば良かったのだ。間に合わないかもしれない。でも、待っていてくれて



いる気がする。それを確かめなければ。そして、皐月に伝えなければ。

息が切れてくる。こんなに全力疾走したのは、どれくらいぶりだろう？ だけど、あと少し。あと、もう少し。

コンクリートで出来た階段を一段飛ばしに上がって、塙太は目的地に着いた。

何故かはわからない。だけど、皐月はいつもここに来る。何か嫌なことがあるたびに、もつと言えば塙太とけんかをするたびにここにくる。この、家からほどよく近い児童公園に。

「…は、はあっ…、皐月……」

息も切れ切れに呟いて、塙太は額の汗を上着の袖で拭き取った。

「塙太…」

こころなしか驚いてみえる皐月の顔が、ぼんやりとしたオレンジ色の街灯に照らされる。ブランコに座ったまま、微動だにしない。その瞳だけが、じっと塙太を見つめていた。息を整えながら一歩ずつ近づいていく塙太を、じっと見つめる。

そういえば、ここに来るたびにいつも皐月はブランコに乗っている。それにも意味があったりして。

そんなおちゃらけたことを思いつく間に、塙太は皐月の目の前に立っていた。

「なに」

普段よりかはか細い声で、こちらを見上げる。大きな瞳はまっすぐはこちらを見つめ、口唇は少しだけへの字に結ばれている。それを見て、その愛くるしさを見て、思わず塙太の顔がほころんだ。

「なに！」

攻撃的にもう一度、皋月が口を開く。

「うん」

満面の笑みで塙太は頷く。

「なんなのよ！」

皋月は気が短い。

さらに笑みの広がった顔をどうにも出来ずに、そのまま、塙太はそれを口にした。

「うん。あのね、皋月。おれ、皋月が好きだ」

「……は？」

両眉をアーチのように上げて、口をきれいなOの形に開けて、皋月がそう言うのを塙太は見つめた。

「いま、なんて……？」

「好きだ」

「なに、急に」

「うーん。急じゃなくて、どっちかっていうと遅れてるんだろ？おれ。ごめん、気付かなくて」

「なに言ってるの。なに、気付かないって……」

「いやだから、好きって言ってなかったなあと」

「だから今言うの？」

「うー、うん。そうなるか。いや、おれはずっと好きだったよ」

「でも、言っていないっていうのは、今日まで気付かなかったんだ？」

「う、うん…。恥ずかしながら…。でも、皐月。おれ、皐月に出逢ったときから、皐月のこと、大好きだから」

どんどんと俯いていってしまう皐月を不安げに見つめる。遅かった、かな。やっぱり。ブランコの方に上半身を屈めて、そつと皐月の名を呼んでみる。

「塙太のばか！遅いのよ、とろいのよ、いちいち！」

言いながら皐月が抱きついてきた。突然のことに皐月を支えきれずに、塙太は足をすべらせてその場に仰向けに倒れ込む。皐月を首に巻き付けたまま。

「大好き！」

公園の砂でしたたかに打った後頭部がじーんじーんと嫌な周波数を頭の内部で奏でる。それでも、皐月のその言葉は塙太を幸せにする。へら、と笑いかけて、皐月の髪をなでてやる。

「うん」

「うんじゃないでしょ！」

がばりと胸に埋めていた顔を皐月が上げる。

「え？」

言葉に頼らずに、それよりも遙かに雄弁な眼光でもって答えてくれる皐月を見て、塙太はその言わんとすることを悟った。

「あ、おれも、好きだ、よ？」

「何でそんなに消極的なの！」

「いや、消極的とか、そういうわけではなくてさ。そう何回も聞かれると、ちよっと恥ずかしいっていうか。強制的に言わされてもっていうか」

「何で！強制的じゃないもん。自分の気持ちに恥ずかしいも何もないでしょ。それとも、塙太はあたしのことを恥ずかしいとも思ってるの、あたしが魔女だから！」

「ああ、全然違う！違う方向に行こうとしてるよ、臯月！」

慌てて両肘を軸に上半身を起こして、臯月と向かい合う。こっぴど自分の額を彼女の額にくっつけて、

「おれは、臯月が好きなんだ。関係ないよ、魔女だとか何だとかはさ」

「ほんとうに？」

口唇をとんがらせて、臯月が尚も問う。その仕草がまるで幼子のようで、塙太はぷつと吹き出した。そして、子供に言い聞かせる保育士の口調で、

「ほんとうに」

下唇を前歯で軽く噛んで笑む。それは臯月の、満足のいったときの顔だ。それに安堵して塙太は視線を動かそうとして、かたわらのブランコに目をやった。

「臯月さあ」

「なに？」

「ブランコ好きなの？」

「は？好きだけど、なんで？」

「いや、おれとけんかするときは、よくこの公園でブランコ乗ってるじゃん。そんなに好きなのかなと思ってさ」

「塙太のばか！」

怒声とともに頭突きを見舞わされた。目の奥がちかちかする。

「え、ちよつと、臯月、さん…？」

「この公園は！あたしと塙太が初めて出逢った場所！このブランコは、あたしが塙太に出逢ったときに乗ってたの！」

「あ、そういえば……」

「そういえばあ？」

ドスのきいた声で言うと、臯月はぴょんと立ち上がってしまう。もういい！と口早に言うのが聞こえた。

足早に去ってしまうかと思えば、汚れてもいない自分のスカートをぱたぱたとはたいてちらちらと塙太の方を気にする。塙太が立ち上がると、ようやく臯月は公園の出口に向かって歩き始めた。その足取りは、足早に行つては不自然に止まり、また急に歩き始めるといふ、何ともわかりやすいもの。まったく。自分の鈍感さにも呆れるな。塙太が臯月の背中に声をかける。

「さーつき」

「なによ」

「おれ、ブランコ好きだよ」

「なにそれ」

「今、好きになった」

臯月は足を止めて、数秒じっとしていた。何度か足を前に出そう

としては踏み出さず、そのうち顔をうなだれたまま、塙太の方に歩みよってくる。

「あのね。言っておくけど！」

居丈高な口ぶりで人差し指を塙太の目の前につきつけると、皐月は、

「塙太は！これからもずっと、あたし以上にあたしのことを好きでないと、だめなんだからね」

無茶苦茶なことを言い出す。

それに優しく微笑み返す。ゆっくり、つきつけられた人差し指を手の平にしまつて、かわりに小指を出させる。それに自分の小指をからませると、

「うん。約束な」

ぼんっ！と音がしそうな勢いで皐月の顔が茹でタコのようになった。もともと色が白いので、余計に赤くみえる。

「ご」によごによ何か口の中で呟く皐月の肩を抱き寄せて、その髪に口づける。そして額に。きつく閉じられたまぶたに。鼻の頭に。頬に。それから、その口唇に。

「やれやれ」

公園の階段を上ったすぐのところ鎮座している瑛里の姿を見つけて、塙太は微笑んだ。

皐月は好き嫌いが激しい。皐月は感情表現が素直で大胆で、なに時として妙にあまのじやくになる。わがままになったり気弱になったり、泣いたり笑ったり、太陽のようで月のように。たまに思ったりもする。自分に振り回されて、疲れないのかなって。急に自分を嫌ってみたり、世界を呪ってみたり。そんな自分に嫌悪感を抱いて泣き出したり。花の香りに一喜一憂。雲の動きに笑い出して、雨の気配に怯える。苺が大好きでピンクが大好きで、部屋の整理整頓が何より苦手。皐月の毎日は忙しそうだ。

そんな皐月の傍におれはいる。ずっといる。

そして、そんな皐月がおれは好きだ。大好きだ。

きつとずっと。

「ほらほら、行くよ、塙太」

「うん」

肩の上に瑛里をのせて、皐月が塙太に向かっておいでおいでをする。

塙太が皐月の手を握ろうとしたまさにそのとき、皐月はその可憐な首を傾げると、まったく何でもないといった風に、

「あ、そうだ。塙太さ、牛乳をボトルから飲んだりするのやめてよね」

怒ってたんじゃない。やっぱり。

苦笑しながら見上げた月はまんまる。

「いめんいめん」

そつと皋月の手に自分のをからませた。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2303e/>

---

僕の彼女は

2010年10月9日19時19分発行